

生徒発表例

◆竹内好の翻訳において語り手の自称は「私」であるが、藤井省三の翻訳では「僕」である。そのせいか、竹内訳の語り手のほうが、年長で、経験もあり、落ち着いた人物であるような印象を受けた。

◆好みの問題かもしれないが、藤井訳の「僕」の語りは、少したどたどしさが残っていて、考えていることに拙さのようなものが混じっている印象をもった。ただし、宏児（ホルル）と水生（シユイシヨン）のこれからについて語っている部分は、藤井訳のほうが表現がまっすぐで、読んだときにすうっと入ってくる気がした。

◆竹内訳の「もともと地上には道はない。歩く人が多ければ、それが道になるのだ。」には心地よいリズムがあって、とても良い言葉だなと感じた。一方で、藤井訳の「実は地上に本来道はないが、歩く人が多くなると、道ができるのだ。」はなんとなく説明的な感じがして、良さが感じられなかった。

◆竹内訳の「希望という考えが浮かんだので、私はどきっとした。」は、すぐ後で語られる「希望」についての感慨とマッチする感じがしたが、それに比べると藤井訳の「僕は希望について考えたとき、突然恐ろしくなった。」のほうは、考えたことの中身とニュアンスが合わない気がした。